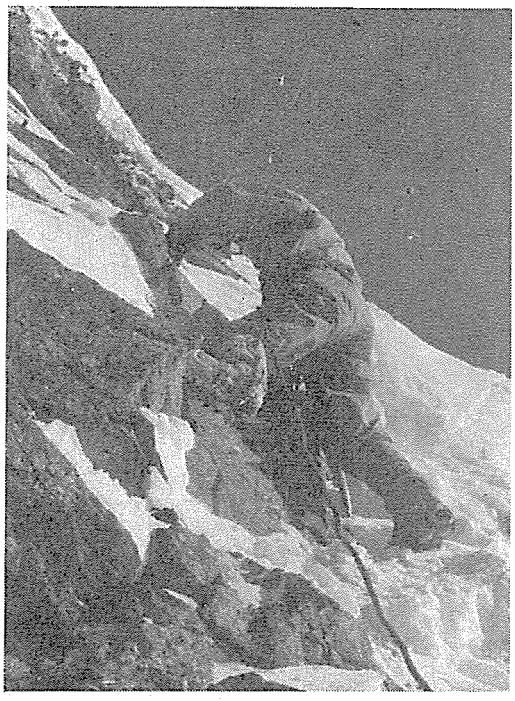
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Aug. 30th, 1957. No 306

關西大學學報

昭和二十六年十月十五日第三種郵便認物可
昭和三十二年八月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第三〇六号

昭和32年8月　第306号



槍に挑む　（山岳部）

關西大學學報局

祖谷の平家村實体調査に参加して

（祖谷の近世資料）

春原源太郎

せこい（大阪辨でしんどい）山路をいつと（ひどい）雨に降られて、昔から平家村と言われている祖谷の伝説や資料を尋ねるために、千里山法律学会の「法意識実体調査」に参加した。伝説のヴェールを被り、そう信じている祖谷山村も、今日では開けすぎている感じである。

一、お屋敷と土居

この地方では部落を「名」（みょう）と呼んでいた。従つて名主をみょうしゆと呼ぶ（遊芸園随筆・閑田耕筆）阿波では他郡にもあるが、一宇名、徳善名、阿佐名というように、祖谷三十六名と称せられる部落が山腹に点在する。そのうちに山岳武士の末孫と言われる四氏があり、東祖谷には平氏、源氏、西祖谷には南朝の臣（河内兵部）と土着郷士の末孫とがある。これら四氏の直流と伝へられている家を、土地の人達は「お屋敷」と呼び、お屋敷にはそれぞれ系譜を証明する中世末期の文書が保存され、重末名の喜多家は「まどころ」（政所）と呼ばれ、東西両祖谷を支配したと伝へられている。東祖谷には平家の旗、源家の白旗が持伝へられているのも古い祖谷を物語つている。

各名には「どひ」（土居）と言われる家があり刀、槍、種子島や古記録が多く保存されていたと伝へられているが、現在自家の系譜を証明するものの外は検地帳（慶長・寛文）の類が保存されている程度で、お屋敷や土居と農民との関係を知り得るような近世資料に乏しく、ほとんど言い伝へである。

これらお屋敷が四氏に分れて徳川時代を経て今日に至つている形態から考へても、簡単に祖谷は平家村と言われていることには多くの誤伝があるようで、武士の土民化か、土民の武士化についても阿波山岳武士の研究には興味ある問題を残しているであろう。特にこれらお屋敷が、源平いづれの末孫であるかということよりも、近世の祖谷山村が山岳武士によつてどのように支配されたかを知ることが、さらに興味あることであろう。しかし旧阿波藩編「阿波誌」にも、祖谷には「戸籍無し」と記されているように、今日では近世資料が意外に少いので、近世史料の調査には不便である。これについて土地の人達の間にも「阿波、土佐の境を接する祖谷では、阿波藩支配に対しては土州領を主張し、土州に対しては阿波領を主張したためである」と言われている。そのためか五人組帳、宗門帳の類すら残されていないのは、逆に祖谷の特色ある点で或は作成されなかつたのかもしれない。このことは喜多家に伝へられた「祖谷山旧記並喜多源治成立」（阿波藩民政資料の祖谷山旧記とは内容がやや異る）にも

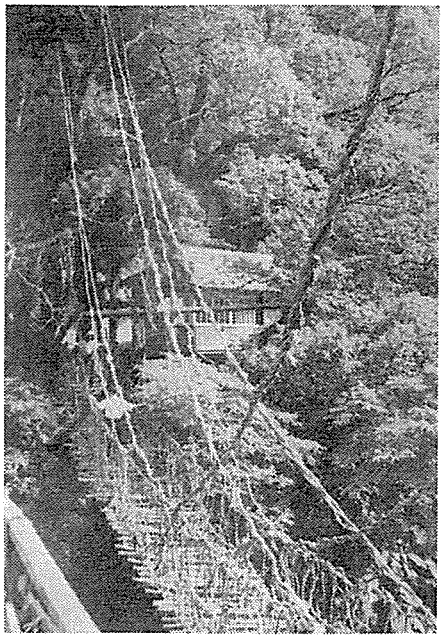
「土州御境目に而両国之下民日夜逢対仕少ニ而も我ニ勝手宜敷方江相極申ニ付」

と、そこことのうかがわれる記載がある。調査班も時に土州領大歩危を通つて次の部落へ有瀬名行く場合もあつた。

二、桧撓料（ひしろりやう）と紙年貢

畠は山腹の急斜面にあり、平地の者には歩くことさへ容易でなく、水田は少い。慶長十七年「三吉郡之内西岡名検地帳」（西岡氏蔵）などによると「切畑、四反、六斗」の如く石高で記されているが、米作の少いこの地方では茶、煙草、大豆、小豆等の年貢を納め、銀納を主とするに至つている。

その年貢に「桧撓料」という名称があ



祖谷の蔓橋（かづらばし）
ふじはしとも名づけられ「阿波名所図会」（文化）には「善穴のはしともいへり」とある。両岸の大木にふじつるを結つけたものであるが、現在は並べて橋が架けられている。
渡っているのは調査班の学生

る。宍料とも書き「しゝりやう」と読んでいる。「しゝりやう」ということから解釈の誤りを生じたようで、祖谷では年貢の代りに獣皮を納めたなどと説明されていることがあるようである。しかしこの説明は誤りで、前記「祖谷山旧記」には「貢物之品茶煙艸麻苧木地鉢木地盆桧撓料大豆小豆等出来仕候に付貢物差上申候」とあり、桧、料を代銀にて納めたことが記されている。「阿波誌」には「厚紙を貢ぎ以て税百三十石に充つ、慶長十七年代るに銀を以てす、宍料と称し、名主之を出す」とあるが、これだけでは桧撓料の意味は充分理解できない。

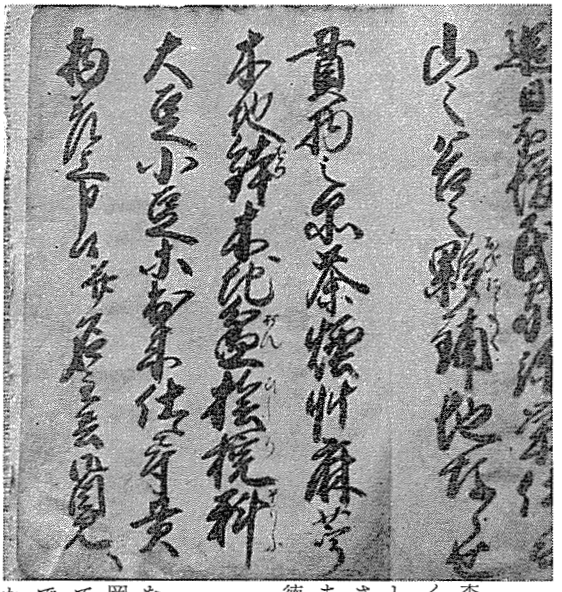
「阿波国に於ける忌部族調査資料」（昭八、徳島県）によると

「寛政元年一宇山の地方諸掛物割符帳の中に宍料と云ふことあり――異本阿波志祖谷の条に年貢金銀を以て収む、是を宍料と云と――旧領主へ収納の節単に宍料とのみは文書類になく、必桧撓料と記載せる類なり、宍とは獣肉の意にあらず、木材のあらになしせさる物を云う方言のよし」

とあり、年貢収納所を「宍料所」と称した。「一宇村誌」（大正九）には「宍料とは貢物の事にて桧栂五葉松等にて長さ二間厚六寸の板角を製したるものを貞光代官所にて収納す――元禄宝永の頃に至り木材少くなり板角一挺の価として米八升四合を代納せしむ」と、年貢として納めた木材の寸法が記されている。木曽山の「くれ木」と同様木材年貢の名称のようで、桧撓料と書くのには意味があるようである。

鹿皮等を納めたことについては「軍用として宍皮年々可納」などの記載もあるが「祖谷山旧記」によれば「名主共御目見へ被仰付候節は鹿皮銘々差上候」とあるから、名主どもお目見得の土産物の如くである。

この地方に紙年貢の行われたことは慶長九年百姓一揆により「御為成程之貢物無御座ニ付――少々出来仕候厚紙ヲ取立上納仕候」「名々高ニ応シ御年貢料之厚紙上納仕申候」とあり、紙年貢から銀納に改められている。近世資料が少いので、これらのことを調査することは困難であるが、前記慶長十七年検地帳には茶、桑、柿などとともに梶の記載があり、西岡名では「梶、四百五拾くろ」となつている。紙の原料となる梶を調査して検地帳に記載されていることは、この地方の重要産物であつたことがうかがわれる。今日では煙草の産地として知られているが、専売法施行当時には上からも下からもわからない天井を三重に作り隠匿した天井があると伝へられている。



喜多家に伝わる「祖谷山旧記」
「茶煙艸麻苧木地鉢木地盆桧撓料大豆小豆出来仕候ニ付貢物差上申候」とある。

検地のことで一言ふれておきたいのは、祖谷では今日でも公簿上に焼畑（切畑）というのがある。山林を焼畑にした新開畑が田畑の検地位付なく焼畑のままで残されていた理由として「切畠切替無之分」は名主の扶持として検地に除外されていたものが、明治を経て今尚焼畑の名称で残り、地目は山林の一種として扱われている。

三、ろくろ師

西祖谷村の西岡は地理調査所の五万分一地図にも「轆轤師」と記入されている。祖谷ではろくろ師の調査ができるものと期待していたが、この地方では「ろくろ師」なる地名に名残を止めている程度で、資料として保存されているものは殆どない。「祖谷」に発表されている文書も西岡家に残されているが、直接関係ある文書であるか否か疑問であろう。徳善名のお屋敷徳善家に保存されている

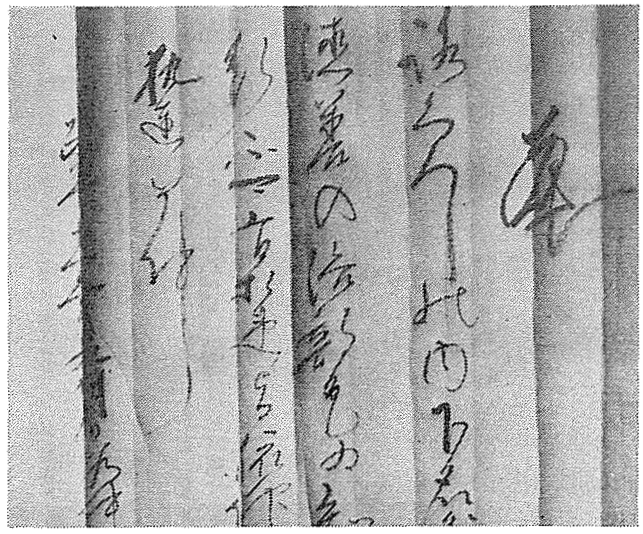
ろくろしの内下名分徳善の治部亮為知行不可相違旨依仰執達如件

正平十一年九月　　日　　為仲　奉

などの文書があり、遺跡をしのぶことはできるが、西岡家文書によつて延享頃に鈴鹿筑前から堀川肥後にあてた「金子弐百疋御手伝之儀」が漸く判読し得る程度である。ろくろ師の氏子狩（祖神への奉賀金）かどうか明かでないが当時が推測される。むしろ前記検地帳に漆の数が記載されているなどは注目すべき資料であろう。木地屋の部落には菊の紋章を刻んだ墓石などがあるので（信州伊那千代村）菊の紋章をたよりに調査してみたが、ここでは社殿の紋章は戦時中不敬として取払われたとの話だけで墓石にはその例がない。

東祖谷村には小椋文書が保存されていたと伝へられているが、今日では担保流れとなつて無関係の人が所

持しているとのことである。ただ東祖谷村役場には明治五年壬申戸籍が保存されているので、それによると「工木地挽」小椋（おぐら）の姓がしばしば見られ、



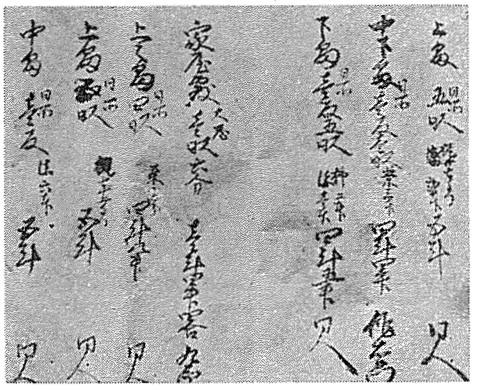
徳善名のお屋敷徳善家（現村長）に伝へられる文書
本文「ろくろ師」に引用

幕末初年の木地屋ろくろ師の所在が判明する。戸籍の記載事項中に「明治六年三月三十日伊豫国熊山ヨリ稼済帰ル入籍」などと記入されていることも、当時の木地屋の生活がしのばれるであろう。前記「祖谷山旧記」に年貢として木地鉢、木地盆が並記されている。生活慣行が異るために「さんくわ」と混同されたことがあるようであるが、多少でも資料の得られる間にもつと明にしておくべきであろう。

四、近親婚と妾

祖谷には特定の家との婚姻忌避の迷信がある。また奥地山村に見られる近親婚は特に珍しいことでもなく、特異な例は交通文化の発達した今日多く存在する筈はなく仄聞の程度に止めておかねばならないが、興味本位の誤伝に対してはむしろ積極的に実体を明にすることの方が望まれるであろう。

前記壬申戸籍によつて概観してみたところ、村内婚が多い。婚姻圏が非常に狭いので血族婚の多いことは想像できるが、法律上禁止する近親婚とは区別されねばならない。一例を落合名にとつてみると村内で同部落内の婚姻が五〇、村内他名（他部落）との婚姻が四六、村外との婚姻は郡内他村一、他郡五、士族の子女は当県士族とのみで部落名記載ないもの八、その他事項記載なく不明のもの約一〇である。落合は六十戸程の部落であるが、父子二代の婚姻事項が記載されているので右の如き数字となる。概して士族などの記載ある村内有力者には部落外からの婚姻が多いようで、家格、家柄などのことが考へられる。これは部落内婚が多いという程度で近親婚か血族婚かは、さらに他の資料による外ないであろう。戸籍の事項記載中興味あるものを拾つてみると後見、夫婦養子などのことは特に珍らしい問題ではないが、傭人が戸籍に記入されている。江戸時代宗門人別帳に奉公人まで記入した例が壬申戸籍にも残つているようであるが、傭人八才などの例があるのは傭人か貰子か断定し難い。養子も総て長男と記載されているので実父の記載によつて区別しなければならない。またこの地方も双生児は後に生れた子を兄姉とする民俗であるが、「二タ児、長女、次女」の例があるだけで、戸籍の記載では民俗と一致するか否か不明である。



西岡名の西岡家に保存される慶長十七年検地帳
掘、漆の記載があり、紙年貢や木地屋のうるしのことが見られる。

珍しい例は「新律綱領」では妻妾二等親とすることが、戸籍にも妾の記載があり、年令は妻四三、妾四六、壬申戸籍から二年後「明治七年四月三日離別」と記入されている。

五、伝説の祖谷

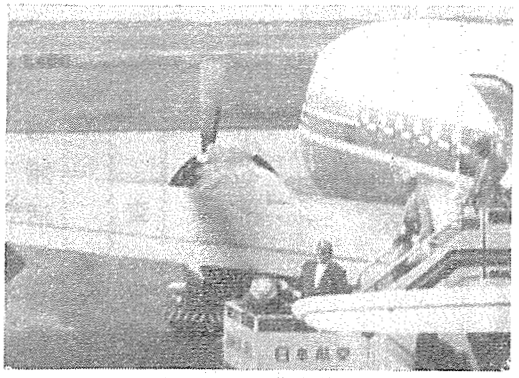
郷土史家笠井新也氏は「阿波の狸の話」（昭二）を書いておられる。阿波は狸の伝説の多いところで、その他のいろいろな伝説は民俗につながるが、それは後日に譲つて私は安徳帝の旧跡についてふれてみたい。祖谷の平家村も安徳帝の旧跡につながるが、祖谷では幼帝は屋島から剣山に遁れたことになつている（平東愛次郎「阿波史」明四四）。従つて屋島から壇の浦入水まで国史として教へられることとは異り、屋島以後はある女児が帝の身代りとなり、壇の浦入水と語り伝へられている。私は前に女帝説と生存説について書いたことがあるので、女児身代りの伝説には自説を裏書するような興味を感じ、祖谷山岳武士には尚多くの疑問をもつが悲劇の幼帝に祖谷の伝説を捧げたいような気がした。

（法制史学会員）

学内報

久井専務理事帰学

専務理事久井忠雄氏は、六月十九日(水)より約一ケ月半、ロックフェラア財団によるスタンフォード大学商学大学院(The Graduate School of Business, Stanford University)における「日本私立大学経営者セミナー」(Seminar for Business Administrators of Japanese Privately Supported Universities)に参加、アメリカ大学経営の理論と実際とを研究し、またシカゴ、ハーヴァード、コロンビア大学等、アメリカの著名な綜合大学を訪れて実地に視察するなど多彩なスケジュールを終えて、八月八日(木)午後五時日航機で無事羽田空港着、同十三日(火)帰学した。



羽田着の久井専務理事

挨拶する山田学生部長

関西大学の夕

昭和三十二年度「関西大学の夕」は四国各地を選び、P・R運動の一つとして七月二十日(土)より二十三日(火)迄四日間、徳島、高松、松山の各地を巡廻。本年は学生を主体として、邦楽、能楽、「彦市ばなし」の演劇を上演、各地で校友の絶大なる歓迎を受け、また各会場に満員の一般市民に日頃の練習の成果を遺憾なく発揮して強い印象を与え、本学の名声を一段と高揚させた。

なお、プログラム、開催地、後援団体は左記の通りである。

プログラム

邦楽　本曲「黎明」長唄「越後獅子」

能楽

演劇　「彦市ばなし」

徳島市　(農業会館)　徳島市教育委員会　徳島新聞社

高知市　(中央公民館)　高知市教育委員会　高知新聞社

高松市　(県立公会堂)　高松市教育委員会　四国新聞社

松山市　(市庁ホール)　愛媛県教育委員会　松山市教育委員会　南海放送　愛媛新聞社

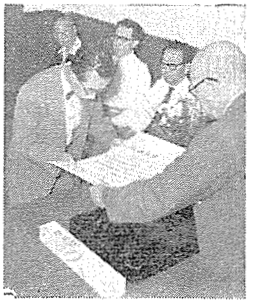
中川庸太郎教授に経済学博士号　授与

経済学部中川庸太郎教授は、かねて本学経済学部教授会に論文を提出して博士号を請求していたが五月二十二日の教授会でパスし、七月十七日付をもつて経済学博士号が授与された。

なお、博士号授与式は七月二十九日(月)千里山大学ホールで行われ、本学役員、各学部長列席の下に、学長より同博士に学位記が授与された。

(主論文名)

「景気変動と経済構造」(一冊)



授与式

(略歴)奈良県。大正九年関西大学専門部経済科卒業、昭和五年コロンビア大学卒業、マスター・オブ・アーツの学位を受け、同大学院にて研究資料の蒐集に従事、同六年関西大学講師、同九年同助教授、同十一年同教授、経済学部長を歴任し、同二十八年大学院兼務

(主著)「景気変動と経済構造」、「国際経済論」、「経済変動の理論」、「世界経済構造と国際分業」等。

人事異動

昭和三十二年七月十五日付

経済学博士の学位を授く

教授　中川庸太郎

教授の諸活動

調査

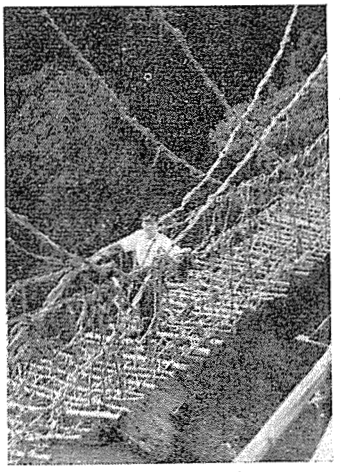
島根大学と共同
隠岐の島調査

昭和二十九年より毎年夏期休暇を利用して、島根大学との共同による隠岐文化綜合研究は、本年で第四回を数え七月八日より出発して挙行された。

本学からは末永教授外学生十三名（以上考古学班）、魚澄、横田、鋳方各教授、有阪助教授、津川、薗田両専任講師外学生一名（以上歴史学班）、井上、高橋両教授外学生一名（以上社会、民族学班）吉永教授、土部講師外学生一名（以上文学班）が参加し、各学術班が独自の行動で島前より調査を始め、島後に移り集結して、再び各班により調査を行つた。

徳島県・東、西祖谷山村の
法生活実態調査

千里山法律学会では、夏期休暇を利用して毎年法生活実態調査を行つて来たが本年も例年通り第七次法生活実態調査を阿波三好郡祖谷地方に選び、七月二十二日から約一週間、中谷教授、春原源太郎評議員、津川正幸専任講師、藤川洋、沢井裕両助手の指導により、学生四十数名が、西祖谷山村、東祖谷山村一帯で、農地、山林関係（所有権、入会権、地役権、地上権、及び水利関係）、家族法関係（婚姻、親子、相続、分家、遺言等）、社会構造（村行、村落生活、家庭関係、治安制裁等）法慣行、奇習及び民俗関係等をとらえて調査を行つた。



祖谷の蔓橋

学会出張

◎経済学部中川庸太郎教授、鶴島雪嶺専任講師は六月五日より十日まで一橋大学における金融学会に出席。

◎文学部三木治教授、前原昌仁助手は六月七日から十日まで東京都立大学における日本フランス学会春季総会に出席

◎文学部藤本勝次助教授、加藤由次郎専任講師は六月二十六日から三十日まで東京大学における日本オリエント学会に出席。

◎文学部三上諦聴助教授は七月八日から七月十二日まで東京大学における中国史研究会に出席。

◎経済学部高木秀玄教授、浜田文雅助手は七月十日より七月十四日まで香川大学における日本統計学会に出席。

海外の大学より

アメリカ法学部協会より
機関誌寄贈

従来機関誌の交換を行つているアメリカ法学部協会(Association of American Law Schools)より、この程左記機関誌の寄贈を受けた。

Journal of Legal Education, Volume 9, Number 1, 1957

デューク大学出版部より
新刊図書寄贈

アメリカのデューク大学出版部(Duke University Press)より、この程本学経済学会「経済論集」編集者宛てて、同大学出版部の左記新刊書を寄贈し、それを書評して是非「一九五七年八月十二日以降」発行の「経済論集」に掲載されたいと申込んで来た。

Hector Menteith Robertson, *South Africa: Economic and Political Aspects* (Duke University Commonwelth-Studies Center Publications), 1957, Duke University Press, $3.50.

法学者国際委員会よりの
図書寄贈

本学と学術図書の交換を行つているハーグの法学者国際委員会(International Commission of Jurists, The Hague)よりこの程左記図書を寄贈して来た。

The Hungarian Situation and the Rule of Law, 1957

Newsletter of The International Commission of Jurists, No.1, April 1957.

昭和31年
校友名簿
在学時代の友を想うよすがに、
また、卒業後の親睦連絡に、
この一冊を備えて御利用下さい
—収載人員二六、〇〇〇余名—
B5判 六〇〇頁
実費頒価五〇〇円
（送料当方負担）
申込先 關西大學校友課
大阪市大淀区長柄中通二丁目
振替大阪一二八七五番

日米大学親善野球

日米親善野球大会は、七月十三日(土)日生球場にて、来日中のアラバマ大学との間で挙行された。

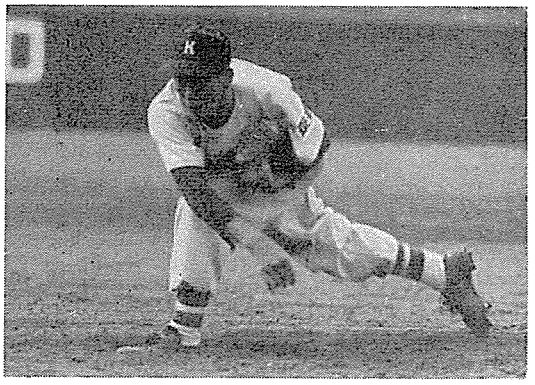
本学は柔投に弱いア大に下手投の柏原投手を、ア大はエース、ローランド投手を立て対戦、三回ライス選手の本塁打で二点、四回、七回に四球で出た走者を二安打で迎え、計四点を上げた。一方本学は七回に一点をかえしたのみで四対一で破れた。

記録

ア大	0	0	2	1	0	0	1	0	4
関大	0	0	0	0	0	0	1	0	1

ア大 53打 9安 1失
関大 33打 8安 2失

一回ア大は意表を衝いたバンドで安打。二回レドフォードが中前安打で無死で走者を出したが、柏原選手の沈む球に凡打してチャンスを逸した。三回ライスに痛烈な二点本塁打を喫し、先得をゆるした。本学も二、三回とチャンスを向えたが決定打が出ず四回ア大は四球のレドフォードが盗塁と二ゴロで三塁を占めブラロックの安打で一点を上げた。七回ア大は四球と二安打で四点目を上げ、その裏本学は上田の四球、二死後越野の安打で一、二塁後、南野の捕前フライのエラーで一点を上げたのみであつた。本学はエース、ローランド投手を良く攻め八安打をはなつたが決定打にかけて四対一で破れた。


力投の村山投手

全日本選抜相撲七尾大会に優勝

第七回全日本選抜相撲七尾大会は、七月十九日七尾市愛宕山相撲場で行われた。

選抜校関東八校、関西四校の十二チームで、団体戦では、予選リーグで六校中四チームが優秀八校トーナメント戦に出場、本学はトーナメント戦で関東の雄東京農大と対戦、これを四対一で破り、準決勝で明大を三対二で、優勝戦では強豪中大を川越、岡崎、寿各選手の善戦で三対二でこれを破り初優勝した。

個人戦では、四回戦に寿、鎌田選手が駒を進めたが、鎌田選手は四回戦で破れ、寿選手のみ準々決勝に進出、準々決勝では中村(早大)をよりきり、準決勝では大塚(中大)をそとがけで破り、決勝では常勝中尾(慶大)と対戦、これをよく攻めはたきこんで団体戦と共に初優勝をなした。

記録(本学関係のみ)

優秀八校トーナメント
一回戦　関大 4—1 東農大
準決勝　関大 3—2 明大
決　勝　関大 3—2 中大
○川越　よりたおし　呉服
山村　おしだし　大塚○
○岡崎　したてなげ　後藤
○寿　よりたおし　平田
仲田　つきだし　浜野○

個人戦
準決勝　寿(関大)そとがけ　大塚(中大)
決　勝　寿(関大)はたきこみ　中尾(慶大)

ヨット部

全日本学生ヨット選手権大会は、二十六、二十七両日大津市琵琶湖石場で行われ、第一日予選では本学はB組で一位となり、第二日の決勝に進出し、決勝レース四回戦が行われ、本学は健闘、惜しく五位となつた。

記録

順位①関学255　②立命大　③京大　④同大
⑤関大210(A123、S87)

体操部

第七回西日本学生体操競技大会は七月二十二、二十三両日大阪府立体育館で行われた。

本学は四六四・八で同大、関学に次で三位となり、個人では徒手に尾張選手が十八点三九を上げ優勝、吊環で悉知選手が三位となり、個人総合では尾張選手が第五位、悉知選手が第六位に入賞した。

放送研究会

放送研究会では夏期休暇を利用して、八月二十四日より六日間富士山麓に於て録音構成として富士ベースキャンプを主題として蝕ばまれていく大自然を、又マイク探訪として「富士の麗」と仮題して伝説を主体としたもの、動植物を学術的に解説する事を主体としたもの、観光的な面を主体としたもの、を混合して一本に製作し、富士の自然とこの日本の美を紹介する為、合宿作製にはいつた。作品の傑作が大いに期待される。

昭和三十二年八月三十日発行
關西大學學報　第三〇六號
編集兼発行人　大阪市大淀区長柄中通二丁目一二番地　久井忠雄
印刷所　大阪市北区川崎町三八　株式会社ナニワ印刷所　電話(35)七二七一番
発行所　大阪市大淀区長柄中通二丁目　關西大學學報局　電話堀川(35)二〇七二番　振替大阪二六七七二番

校友バツチ

校友

校友会本部の動き

七月三日　大淀支部発起人会
同　七日　天王寺支部発会式・午後二時天王寺区役所、白川理事長、矢口教授、森川教授、中谷教授、大月会長、長柄副会長、門上組織部長出席
同　八日　組織部対学一代表懇談会・午後五時半天六評議員室
同　八日　広報部会　理事会議室
同　十日　高槻市役所関大会発会式・高槻市役所
同十一日　大正支部発会式・大正工業会、森川教授、長柄副会長、安井校友課長出席
同十一日　南支部発会式・大阪観光ホテル、矢口教授、大月会長、門上組織部長出席
同十三日　組織部会・理事会議室
同十三日　愛媛支部再建発会式・ミキタツ荘
同十八日　会館建設委員会・太洋軒
同二十日　代議員会・千里山大学院階段教室
同二十七日　国税局支部・国税局会議室、西村理事、大月会長、長柄副会長出席
同三十一日　広報部長・理事会議室

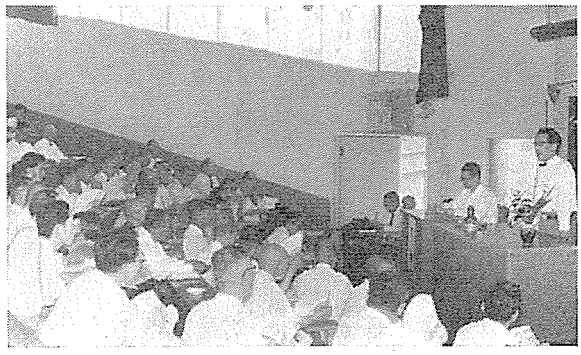
校友会代議員会

七月二十日（土）午後二時半から千里山学舎大学院階段教室で本年度第一回代議員会を開催。出席者八十七名。

会は坂本総務副部長の司会で始まり、長柄副会長の開会のことば、大月会長の挨拶、西村理事、阿部評議員会議長、森川経済学部長の祝辞があつた。

次いで各部事業報告、総会開催の件、校友会館の件、その他の審議が行われた。議事を終了して会場をホールに移して懇談　午後七時散会した。

出席者
阿部　甚吉　秋田友三郎　伊藤　太平　池田信之助
池谷亀太郎　石原　孫市　岩城　富子　岩本　公夫
上山　喜雄　梅原貞治郎　越智比古市　大国　正己
大島　武夫　大月　伸　岡内　瀞一　岡本　顕潤
置田徳次郎　奥村　孝　樫本　信雄　門上　敏夫
金本　朝一　鎌田　嘉之　神崎伝次郎　神屋敷民蔵
神吉　等　寒川　喜一　木村　吾郎　北川甚太郎
北原　元茂　鞍内　国二　小嶋竜太郎　小寺小市郎
後藤　正身　郡　栄作　左海　伊和　佐伯　博臣
斎藤　幸昌　坂本　竜夫　桜田　誉　沢村　宗平
塩見敬一郎　篠原昭三　下条小野右衛門　神保敏男
新谷　幹夫　角田好太郎　滝井　義男　高井　真治
滝　利幸　谷口　隆佳　千厳　克郎　鶴沢　寅彦
霜田　武　中谷　敬寿　中務　平吉　中西　与七
中本　勇　長沢　健一　長柄　金吾　西村治三郎
西本　寛一　畑下　辰典　林　信夫　東浦　栄一
平井　三朗　平沢農一　福原菊次郎　前川太良右門
松尾　高一　松浪　庄造　松広　寿衛　真鍋竹治郎
三島　律夫　村尾　静明　村上　精三　森川　太郎
八沢　良彦　矢口孝次郎　矢野　文雄　安井　章吾
山口　辰雄　山崎　哲英　横山　栄吉　吉田　奎文
吉田　虎雄　渡辺　治明　和田栄太郎


大学ホールで行われた代議員会

富山支部総会

富山支部総会は六月十六日（日）立山弥陀ケ原ホテルで開催。

当日は好天に恵まれ、会員十三名が参加、ガイドの説明を聴き乍ら雲上に上つた。安田倫蔵、古屋東両氏が風邪のため欠席したが、この会の席上新役員が選ばれた。

決定役員
支部長　児玉信治郎
副支部長　宮本五郎
幹事長　安田倫蔵
幹事　井田宗明　橋詰兼義　宮田一良　矢内原和一
鈴谷厳　延谷謙三　関岡久男　小森実
顧問　古屋東　栗山基一

神戸支部総会

神戸支部総会は六月二十九日（土）午後二時より神戸市生田区海岸通「神戸商工会議所」で本年度母校卒業生の歓迎、懇親を兼ねて定例総会を開催した。

出席者
学校側　白川理事長　岩崎学長　桜田教授　大月校友会長　門上組織部長
来賓　安井栄三
会員　森又雄　水本信夫　西邦夫　堤熊治　田中稔
石田厳　赤井定雄　久保正信　中野正喜　多賀恒一
田辺由治郎　達川元一　野村光治　井沢国雄　阪田啓二　山本春治　貴谷喜作　瀬郷清市　今岡琢磨
野田俊春　淵崎邦郎　水本恵庸　吉田貞澄　橋本太一　飯沿銈一郎　劉仁徳　木下正一　山崎敬義　榎本昭　赤剏正夫　高原博　香川直行　中井清夫　岡田正己　下条小野右衛門　向井裕亮　菊池圭一　片山菊治郎　奥村孝　内海明　池田明　西光建次　照繁造　土井義弘　水本千代松　岡田芳太郎　小川立朝　貴村一雄
新卒業者
尾白武志　小原啓史　橋岡市雄　尾崎英輔　古沢満雄　公原康雄　佐々木四郎　加納昂　西田堯　叫兼光　加古孫清　橋本清　平尾清志

天王寺支部発会式

天王寺支部発会式は七月七日（日）午後二時から「天王寺区役所講堂」で開催。参集した会員は五十数名で大学から白川理事長、中谷、森川、矢口三教授が出席、校友会からは大月会長、長柄副会長、門上組織部長、神屋敷事務長が出席。

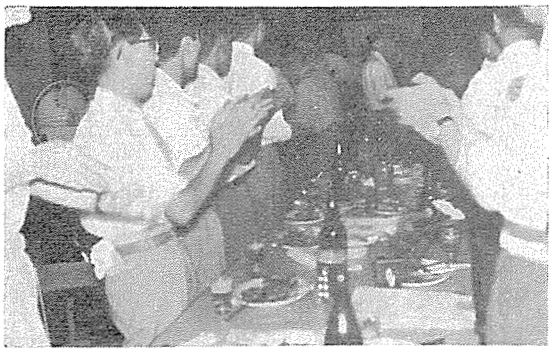
会は平沢発起人の司会で始められ、木村楢太郎氏が開会の挨拶を、羽賀一郎氏が経過報告を行つて議事に入つた。議長には池田要二郎氏が推され、支部規約、予算案共に満場一致で通過した。役員選出は詮衡委員で審議の結果支部長池田要二郎氏外役員が決定した。

来賓からそれぞれ挨拶があつて後記念撮影、祝杯をあげ学歌を斉唱午後五時半閉会した。

決定役員
支部長　池田要二郎
副支部長　木村植太郎　藤波一治
幹事長　平沢農一
副幹事長　秋田友三郎　三輪祥三
会計監査　山田栄一　東田繁一
顧問　富田貞男　三好万次　山口定寛　竹川喜郎
相談役　羽賀一郎　南清　多田栄　野口房雄　国分吉広　門田文三

南支部発会式

南支部発会式は七月十一日（木）午後六時から、大阪市南区「大阪観光ホテル」五階ホールで開催、大学から矢口教授、大月会長、門上組織部長が出席した。



盛会裡に拍手で閉会した南区支部発会式

会は福原菊治郎氏の開会の辞、柴田精二氏の経過報告で始まり、田中藤作氏が議長となつて議事に入つた。

会則案は異議なく承認され、役員選出は選衡委員で審議の結果支部長に田中藤作氏、外役員が決定した。来賓より挨拶並びに学校事情、校友会事情の説明があり、鎌田氏より祝電が披露された。

会員一同和やかにビールで乾杯、九時になつて一同起立して学歌斉唱、万歳三唱して散会した。

決定役員
支部長　田中藤作
副支部長　中谷政男　鎌田嘉之　滝口武雄
顧問　白井誠　中村公男
相談役　坂本竜夫　福原菊治郎　西浦義一　永田旭
棚野誠幸　太田正春　国分重雄　吉田奎文　鈴木庄
太郎　太平威治　保井剛一　喜多由造　加藤正次
前田滝造　塩田好一　下村宗二　祖父江義郎　米田
浩二　井上文雄　浜田喜一　米田俊雄
幹事長　千葉克郎
副幹事長　芝田精二　畑下辰典
幹事　鶴田武　吉田秀文　佐伯崇邦　坂本忠司　越
智八郎　牧野雅男　後藤恒幸　水島幸子　岩崎哲郎
田代敏郎　三木正之　中島富一　天野幸信　赤沢謙
一　西家一夫　河井美夫　小島聰男　児玉登　鶴沢
寅彦　真崎賢二　宇崎寿美子　西川成雄　鶴沢清

大正支部発会式

七月十一日（木）午後七時から大正区大正通六丁目「大正工業会館」で発会式を開いた。大学から森川教授、長柄副会長安井校友課長が、校友会から金本組織副部長が出席した。会は井上博造氏の開会の辞並に経過報告で始まり、次いで横山氏を議長に選出議事に入つた。会則審議役員選出を行つたのち、役員の挨拶、来賓祝辞、祝電披露があり、金本組織副部長の発声で万歳を三唱して閉会し、懇談会に入つた。ビールで乾杯、歓談数刻を費し十時に散会した。

大正支部発会式

決定役員
支部長　横山栄吉
副支部長　井上博造　糸数幸和
幹事長　植包純　幹事　三十七名

日立造船関大会

第四回大阪地区懇談会を七月二十日（土）「中山山荘」に於て開催。

当日は多数の会員諸氏が参集、開会の辞、一般経過報告、会計報告がなされ、引きつづき同日開催の代議員会に出席していた木藤安之氏から模様報告、質疑応答があつた。議事を終つて懇談に移り、和気靄々裡に校友会と日立造船関大会の発展を祈つて散会した。

出席者
本社　木藤安之　栗田豊平　四辻厚躬　佐藤悌次郎
広田久夫　乾忠雄　天野金次郎
設計所　高牟礼軍蔵
技術研究所　長崎隆雄
桜島工場　岩坂邦雄　斉藤義久　安島英憲　長田義明
築港工場　田中敬三　多田慶次郎　浅岡勝彦

岸和田支部総会

岸和田支部総会は八月三日（土）午後四時から岸和田市商工会議所「自泉クラブ」で開催。当日は約五十名の会員が参集、大学から森川経済学部長、大月校友会長、神屋敷事務長が出席した。

会は岸田久馬幹事長が開会の辞を述べ森川教授の挨拶があつてのち大月校友会長が校友会事情を説明した。次いで経過報告、役員改選が行われた。新副支部長松原政治郎氏の挨拶で議事を終了。森川教授の「欧米を廻つて」と題する一時間にわたる講演があつて後、料亭「静」に会場を移してビールをくみ交し乍ら懇談した。最後に学生歌、逍遥歌、学歌を元気に斉唱し八時散会した。

決定役員
支部長　辻野新一
副支部長　松原政治郎　伊藤増一　森田森
幹事長　岸田久馬
副幹事長　鼓次郎　高林治　滝北二郎　中山一義
会計幹事　外山英一　水田博史

記念植樹募集

昨秋創立七十周年を記念して施設の拡充を図り、千里山及び天六両学園に近代建築の学舎を完成し得ましたことは洵に御同慶に堪えません。

さて、この構築美に配するに樹木や芝生の景観美を以てし、造園技術の粋をあつめて、教育環境を形成することは、日々これに接する学生達にあるいは憩いの、あるいは思索の場所を与え、学習研鑽の資となるべく、また、学窓を出でては学舎と共に、一本の樹木にも母校への思慕の情を抱かしめるでありませう。

かかる教育環境形成の重要性に鑑み、本学では植樹造園につとめたいと存じておりますが、また有志の方々からこの趣旨に御賛同下されて樹木の御寄附にあづかり得ば幸甚に存ずる次第であります。

昭和三十二年三月

關西大學

何卒右趣旨に御賛同を賜わりまして、単価表により樹木御指定の上左記宛御申込下さいます様御願申上げます。

一、樹木単価表

イ、楠（高さ十尺、巾七尺、太さ目通一尺）壱本一〇、〇〇〇円
ロ、銀杏（高さ七尺、巾三尺、太さ目通四寸）同 三、〇〇〇円
ハ、南豆ハゼ樹（高さ八尺、巾五尺、太さ目通六寸）同 六、〇〇〇円
ニ、山桜（高さ七尺、巾三尺、太さ目通二寸）同 五〇〇円
ホ、ユーカリ（高さ八尺、巾三尺）同 一、五〇〇円
ヘ、メタセコイア（高さ四尺—五尺）同 一、五〇〇円

単価表の値段は送料、植込村工並に根着き迄（枯れた場合は植替）の責任保証となっています

二、記念植樹御申込先

關西大學校友課
大阪市大淀区長柄中通二ノ一二
振替口座大阪一二八七五番

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十二年八月三十日発行（毎月一回三十日発行）

關西大學法制史學会
關西大學經濟學會經濟史研究室 共編

大阪周邊の村落史料

A5判 フランス綴箱入

本書は關西大學図書館に所蔵されている貴重な村落史料のうち、庄屋文書といわれる庄屋の蔵に放置されていた記録を纏めて、法制史及び経済史は勿論、一般史学やその特殊部門の研究に寄与せんとして公刊されるものである

庄屋文書のなかには、庄屋自身の任命、退役から、触、達、回状、農民の五人組、宗門改、検地、耕作、年貢、水論、新田開発は勿論、田畑建物の売買質入、奉公人、人身売買、縁組、相続、遺言、往来手形、寺送り村送り等に至るまで、百般の法律行為に関する文書までが保存されているので、近世農民の法律および社会経済生活はこれらの史料によつて明かになるであろう

第一輯（庄屋文書） 既刊
二二〇頁 頒価 金四〇〇円

本輯に選んだのは訴訟に関する書類の多い河州松原村、摂州味舌、耳原両村の庄屋留書である。

第二輯（耕肥、拝借銀、頼母子） 既刊
一七〇頁 頒価 金三五〇円

本輯に選んだのは、農耕の基となる肥料と、その購入資金と入手方法に払つた農民の努力と法律関係、および金融、とくに御発起無尽と称せられる藩政頼母子の運営等に関する書類である。

第三輯（証文集、村役人） 既刊
二二五頁 頒価 金四〇〇円

（なお御入用の方は大學出版部へ直接御註文下さい）

発行者 關西大學
発売所 關西大學出版部
大阪市大淀区長柄中通二丁目